

6年2組

 「わたしたちの奇跡の小麦」の最終販売  
 ～届けたい笑顔と幸せ～


## 再び…わたしにとっての意味をつくる



6年2組で3年間続けてきたパン・お菓子の調理活動。5年生の時には、赤カビにより小麦が全て廃棄になってしまうかもしれないという危機を乗り越えて収穫した「奇跡の小麦」の存在。そんな私たちのこれまでの活動の集大成として、最後はその奇跡の小麦を使ったパンやお菓子を販売することになりました。その中で、子どもたちの、「できるだけ多くの人に私たちの活動を知ってもらいたい。多くの人にパンやお菓子を食べてもらい、笑顔や幸せを届けたい」という思いから、これまでの学校の行事に合わせた販売から、学校の行事に乗っかるのではなく、何も無い平日に自分たちで

お店を開いて販売をしたいという願いが生まれてきました。一方で、「平日にお店を開いて人が集まるのか」、「結局、保護者の方に来てもらって買ってもらうだけじゃないか。それだったら参観日に売った方がいいと思う」という反対意見もあり、どんな日に販売するのかということについて意見が分かれてきました。そこで、参観日に売った方がいいのか、それとも何も無い平日の方がいいのかという問題について子どもたちと話し合いました。

話し合いの中でAさんが、「これまで参観日に買っていた保護者はこの学校の6年2組だから、子どもたちだからという理由で買っていたのではないかな。だから、そうではない場面で販売することで私たちのパンやお菓子もちゃんと売れるんだということを証明したい」と話しました。これまでは、ある意味、温情で買ってもらっていたのではないかな。そのことが悪いというわけではないけれども、そうやって買ってもらっている私たちの販売活動はどうだったのかということ問い直していた子どもたちの姿があったように思います。しかし、Bさんが「確かに知らない人に販売するのは憧れでもあるよ。でも、今の自分たちにはまだ早いと思う」と話す。「参観日ではない日に販売すればそれだけでチャレンジかもしれないけれど、前回の参観日で買えなかったおうちの人もいる。そういう人に買ってもらうのもチャレンジだし、個数だって足りなかった」、「おうちの人も買いに来たいと思う。参観日じゃない日に休みをとって来てもらうのは大変」と、参観日でない日に販売することのデメリットの話が多く出てきました。全体の流れが「参観日での販売でいいのではないかな」となり、いよいよ参観日で売ることに決着するかという雰囲気の中、Cさんが突然、「参観で販売するのって意味ないんじゃない」とつぶやきました。実はこのCさんの考えは、前の時間からCさんが感じていたことであり、私は、Cさんの考えを事前に知った時、はっとさせられたところがあったため、このCさんの考えを全体に位置づけたいと思っていました。そこでCさんに、「なぜそう考えているのか」と問い返しました。すると、Cさんは、「参観日に販売するという活動はこれまで何度も繰り返してきた。今回も全く一緒じゃないか。そうすると同じことの繰り返しになって、そこに何の意味があるかわからない」とも話しました。そんなCさんの考えを聞いて、「同じことの繰り返しでもそこに意味をつくれればいい」と話す子どもの姿もありました。そこで私は、7月に行った谷浜鍛錬会で意味がないと思っていた10分間を意味あるものにしようとしたDさんの姿を、子どもたちと共有しました。「この言葉、Dさんが言ったんだよね。うちのグループの話だ。」、「確かに参観日に販売する意味をちゃんと考えたい」と子どもたちは話していきました。谷浜鍛錬会に限らず、そこに意味をつくることの大切さを、経験を通して学んできた子どもたち。子どもたちと本当に大事にしてきたことがそこにはあるような気がしました。だからこそ、最後の販売活動はこの大事にしてきた「わたしにとっての意味をつくる」ということが1番の問題になっていったように思います。わたしたちにとって、最終販売はどんな意味があるのかを考え合った結果、「新しいチャレンジをし続ける」ということを大切にしようと考えました。そこで、1, 2, 3年生の参観日に、他学年の保護者や地域の方に買いに来ていただいたり、お隣にある附属長野中学校、附属特別

支援学校に訪問販売に行くという新しい販売の仕方でも、多くの方に食べていただき、笑顔や幸せを届けようということになりました。

## 3年間のわたしたちの歩み…全てが宝物だと思いました



2月25日、6年2組が3年間続けてきたパン・お菓子作りの集大成となる最終販売が行われました。初めてわたしたちのパン・お菓子を買われた方からは、「すごい。手作りなんですか」という驚きの声と共に、「これは昨日から仕込んで作ったんですか」と尋ねられる方が多くいました。子どもたちが、自信満々に「今日の午前中に作りました」と答えると、皆さん、さらに驚かされている様子がありました。今回の販売でのパン・お菓子の

ラインナップを見ると、その見た目や味はもちろん素晴らしかったのですが、その数量も目を見張るものがありました。一見すると前日から調理を行っていないと、これだけの数は作れないのではないかと思うほど、子どもたちが準備した数量は素晴らしいものがありました。前回の参観日では早く売り切れてしまったため、「前回より多く作りたい」という願いがある一方で、「一人ひとりがたくさん作りすぎると、今度はオープンの数などが足りなくなってしまい、販売までに焼きあがらなくなってしまう…。それぞれどのぐらいの量を増やしたら全体の販売が間に合うのか」という問いも生まれていきました。そういった意味でも、3年間の集大成が問われる午前中の調理でもありました。結果、子どもたちの作る量は絶妙なものがありました。販売までにしっかりと焼き上げ、数量も質も、それぞれ自分なり納得して、自信を持って販売している子どもの姿がありました。本当に本当に子どもたちの頑張りに感服でした。

販売では、6年生の保護者や他の学年の保護者の方、そして附属長野中学校・特別支援学校の先生方にも買っていただきました。この3年間、パンやお菓子を作り続け、私の活動が私たちの活動へととなり、その私たちの活動が他者、社会へと開かれていった3年間の活動であったように思います。この3年間の活動は、一人ひとりにとってどんな意味があったのでしょうか。子どもたちと最終販売や3年間の活動について振り返ってみました。

最初は、全然上手に作れなくて、あまり満足していなかったけれど、どんどん上達して行って、6年生になればめちゃくちゃ上手に作れるようになりました。私たちの小麦の良さがギュッと詰まっている感じがしました。この3年間は、すごく楽しかった!!けれど、その楽しさの中には大変なことだったり、難しかったこともありました。でも、その苦労から生まれることがたくさんあって達成感がありました。全てが宝物だと思いました。(Eさん)

最初は、丸パンを作って、美味しくなかったけれど、自分たちで作ったパンができてうれしかったです。そこから色々工夫してパンを作り、買い物も行き、パン屋に教えてもらったり、小麦・ソルガムを栽培したり、天然酵母を作ったり…今まであまり気づかなかったけれど、私たちの3年間はとてもかけがえのないすごいことだと思いました。大変なことあったり、うまくいかないこともあったけれど、何より「パンを作る」ということが楽しかったです。どんどん上達していくのがうれしかったし、食べてもらった人が笑顔になるようなパンができて、食べてもらって幸せでした。これからも、この経験を大切にしていきたいです。(Fさん)

